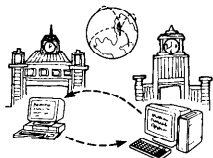


巻頭言

身近な情報化への取り組み



坂 和 磨†



身の回りの身近な情報化の現実、先進的とされている環境とは大きな隔りがある。すぐ目に付くのは、ボイスメール、電子メールの実用である。

電話をかけた時に相手が不在のため、あきらめることはよくあることである。これをカバーするものとしてボイスメールがあり、相手が不在時にメッセージを相手の電話に記憶させ、一方相手は出先からでも記憶されているメッセージの内容を取り出した上で、すぐに応答し、応答を再びボイスメールで返すこともできる。

このようなボイスメールの実用化には何等難しい面はない。しかし、現実には身近な情報化のインフラとしての電話機が、一人一台無いのが普通である上、PBXにボイスメールの機能が備わっていないことも多く、身近で広く実用化されるに至っていない。

電子メールについても研究者、技術者を中心として、UNIXメールの利用がすでに当たり前となっている。しかしオフィスの中のインフラとして一人一台のパソコンが未だ普通の状況ではない上、電子メールのトラフィックを考慮したネットワークの整備が遅れていることもあり、電子メールが日々のビジネス活動の中で利用されているのは未だ一部にとどまっている。

また、例えば Lotus Notes などのグループウェアも身近な情報化のインフラとして欠かせないものとなりつつある。グループウェアにより、遠隔地にいるメンバーが相互に協力し、情報を共有しながら知恵を出し合い協同作業で1つの仕事を迅速にやっつけるのを目にすると、その知的生産性の高さに大きな驚きを感じざるを得ない。

例えば、顧客よりの商談が発生し、提案と見積りを急いで出す際など、出先の営業マンが販売支援部

門のメンバーに見積りの支援を求めると共に、提案の技術的内容をシステムエンジニア部門のメンバーに問い合わせ、各々の応答を集約することを繰り返しながら、あっという間にまとめあげてしまう。まさにグループウェアという名前の通りに、遠隔地にいる複数のメンバーの協同作業のインフラができ上がりつつある。残念ながら身の回りの現実では、未だグループウェアを日常のビジネス活動の中で実用するには程遠い状況にある。

一方このような身近な情報化は、グループウェアの例に見られる通り、生産性特にホワイトカラーの知的生産性を大きく左右するものであり、実用を拡大するニーズは極めて大きいものがある。

これに応えるためには、身近な情報化に取り組む着実な努力が必要なことは勿論であるが、情報処理学会が身近な情報化を加速する研究活動を一層活性化して、優れた研究成果を積重ね、実用化への道を切り開くことを期待したい。

また、情報処理学会自らも身近な情報化の実用に取り組んでいく必要がある。幸い平成5年度には、情報処理学会論文誌の特集号で LaTeX を用いた電子化出版の試行が行われ、このほど発行の運びとなった。これも身近な情報化の大きな成果である。ここに至るまでに積み重ねられた、多くの関係者の方々の御尽力、御協力に深く感謝申し上げる次第である。電子メールについても、平成4年度から試行を開始して、実用が定着しつつあり、今後学会活動における一層の活用拡大が予定されているのは心強い限りである。

今後とも先進的なグループウェアの実用化などでも、情報処理学会がリーダーとして範を示す役割を担い、身近な情報化への取り組みを先導してゆくことを期待している。

(平成6年3月2日)

†本会理事 三菱電機(株)

